

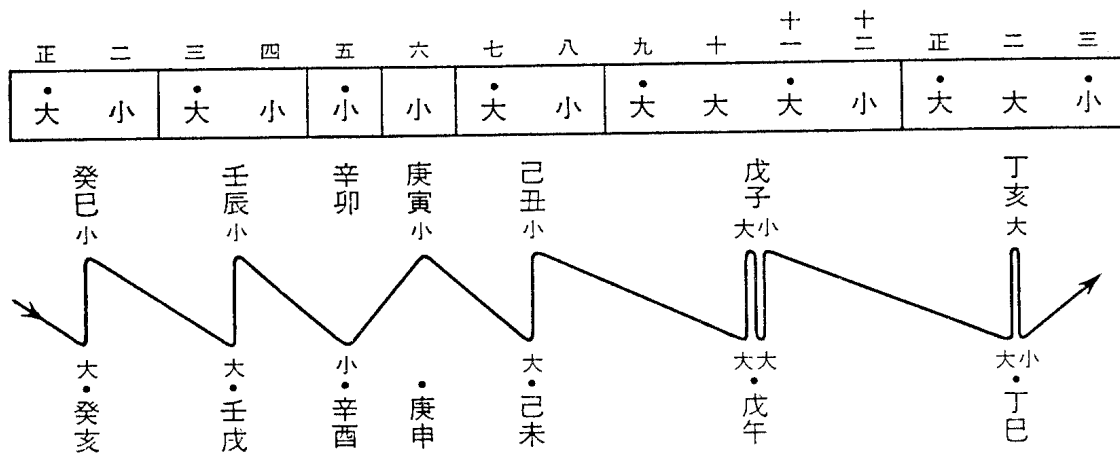
「宣明暦時代の月朔表と節気表」補説と正誤

桃 裕 行

本誌61号に書いた表記の拙稿は、表に対する説明が十分でなかった為に、必ずしも大方の理解を得られたとは思われないので、再び紙面をお借りすることとした。先ず月朔表の作成の主旨・作成の方法・表の効用について述べ、次にこれも不十分だった節気関係の論文を紹介し、終りに正誤表を掲げることとする。

この月朔表を作った主旨は、これまでの検討ですでにほぼ定って来ている宣明暦時代の月の大小と月朔干支とを、どの様に表示したら簡便で使い易いものになるかということを試みたままで、それ以上に深遠の理を持つものではない。普通の年表では、毎年の干支は記されるが、毎日の干支までは記されない。この毎日の干支を書く代りに、月毎に、大の月(三〇日)か小の月(二九日)かの別と、一日の干支(月朔干支)とを一記したのが、古来数多く作られた『日本長暦』『三正綜覧』などの長暦類である。私は毎月の大小・月朔干支を一々書かないで分らせる表示の方法はないものかと考えた。その為には、大の月はひと月三〇日で、小の月はひと月二九日であること、日の干支ひとめぐりは六〇日であること、ただこれだけのことを利用した。すなわち大の月が二つ続くと干支は一巡する。そのため大が続く限り(但し四つ続くと最大である)二つの月朔干支が交互に繰返される。次に小の月が来ると、もしそれが仮りに大の月であった場合に次の月の一日(朔日)になるはずの日の前日、すなわち干支一つ遡った日が次の月の一日(朔日)となる。次にはここが起点となって同じことが繰返される。この様に小が来るごとに、その次の月は、月朔が一つずつ遡る。(小が続くのは三つまでである)

そこで文保二年(一三二八)ははじめから翌年はじめにかけてを例にして、与えられた月の大小を順に並べ、小が来るごとに界線を引いて枠を作ると次頁の図の上段の様になる。この枠の中では、大が続く限り、六〇干支の中、三〇を隔てたもっとも遠い干支



(大は縦の方向に、小は斜の方向に進む)

同志(例えば癸巳と癸亥)やりとりを繰返す。図の下段で言えば線は上下縦の方向にだけ動く。そして小が来ると、その次はそれぞれ一つ廻った二つの干支からなる次の枠へと移動する。図の下段で言うところ、これまで縦に動いた線が斜めに動くのである。

(小が続けば斜線が続く。その場合取残される干支が出る)

次には、大小の文字を、正二三以下の月名に置き換え、下段の・印を付した干支が月朔となる月に・印を付して行くとすると、先ず正月に・印を付け、以下一つ置きに付けることとなる。

干支二つ一組の枠は順次右へ三〇作ることになり、次に右端から下段の左端に移るが、移る際・印は一つ置きにならず、無印から無印へ、・印から・印へと続く。これは理屈から言えば、枠は更にあと三〇右へ延ばす可きであるからと考えれば了解される。

この様にして表を作って行き、行を重ねて行けば、月毎に一々記さないでも、月の大小、月朔干支は一目明瞭であろう。小の月をゴシックで組んだが、目立たなかった。枠の内の最後を小と心得れば必ずしも活字の種類を変えなくてもよかったのであるが、区別する以上もっと工夫すべきであった。

なお曜日の記入であるが、これは毎月一日の曜日で、大の月三十日は四週間(二十八日)に二日余るので、枠の中では一つづつ飛んだ曜日となり、小の月は一日余るので次の枠へ移る時は連続した曜日となる。

次にそれではこの表の他の長暦類と比較しての得失は何であろうか。先ず失であるが、普通の長暦類では、一年分が一行とか、あるいは一つの枠に囲むかしてひとまとめになっているのに対して、この表では、年のけじめがない。それだけでなく、ちょっと見には年と関係のない得体の知れない枠が沢山あるのが目に付く。恐らく最も抵抗感を与えるのはこれであろう。しかし枠の意味は前述した通りであり、年のけじめのないのは、むしろ干支も曜もとぎれず連続していることを見取れる得がある。

次に得としては、第一に毎月一々大小や干支を書く必要がないので、スペースが検約になる。(従って調査旅行への携行がた易いということにもなる) そればかりでなく、大小や干支を書誤るという恐れもない。

第二に、新史料、其他の理由で、大小・干支を訂正す可きものが出た場合、大てい月名を一つの枠から、隣の枠へ移すだけですむ。但し曜は書換えなくてはならない。(連続して訂正すべき場合も、せいぜい二三か月であらう。閏の異同も無いとはいえない。地方暦では現にある。) もしかけ離れた干支が出た時は、それは書誤りがあると見る可きである。この表の利用者にお願ひし度いのは、右の様に若しこの表に合わない史料が出た時は是非連絡していただき度いことである。

第三に、特定の或る月朔干支が出て来る頻度・間隔が見易いことである。一つの枠の中に月名が三つ以上ある場合、一つ置きに同じ月朔干支が出る。しかし一度この枠を離れると、三〇の枠を経過するのに五年余りかかるから、それだけたたないと、同じ干支が廻って来る可能性がない。可能性と言ったのは、もしその枠の中に一つしか月名がない時は、同じ干支がないことがあるので、更に五年余りを待たなくてはならない。この様に一つ置きの月に同じ月朔干支が出るかと思うと、五年・十年・十五年とたつて始めて同じ干支が廻って来ることもある。これをもし普通の長暦類で検索する時は気を勞すること甚しいが、この表による時は一目瞭然である。

第四は、特定の何月という月が、特定の月朔干支を持つのは何年と何年かを検索する場合である。暦断間の年代推定の場合これが必要で、もともとこの表を作った目的はここにあった。第三の場合よりも広い範囲に亘って検索しなければならないが、もしこの表によって縦に通して検索する時は、宣明暦時代八〇〇年全部を検索するとしても、ものの二分とかからないであらう。その様な目的の為ならば純粹な索引を作ればなお早いと言われるかも知れないが、年代推定の鍵は一個とは限らない。数個連続の月朔干支が与えられることもある。その場合、索引では不便であるが、この表による時は、まとまったものとして一度に検索できる。

この様にこの表は縦横同時に見渡せる妙味ある表と思うのである。そして理科の方は決してこの様な表は作らない。多分に文科的発想であると思う。

なお曜日は暦断簡の年代推定の補助手段となるので記入したが、年代推定に是非欠かせないのはむしろ節気によるチェックである。それは朔と節気との二つが暦構造の二つの要素であるからである。

節気についても、月朔表と同じ様な表を作って見た。先ず節と中とに分けると、(節と中とは意義が違ふと私は考えるので、二つを分ける理由も成立つ。ここではしかし表作成の便宜の為になる) 節と節、中と中との間隔は三〇日余りなので、干支二つ一組の枠内のやりとりから、余りが積もって一となる毎に次の枠に移ることにした。この場合、月朔表と違って、干支は廻らず、

先に進むのである。この様にして作って見たところ、月朔表と違ってスペースはとるし、月朔表の様な妙味も發揮できない。そこで前の誌上では発表はやめにして、これまでの小川清彦氏以来の方法を紹介するに止めた。ただ文科の人は簡単な計算でも嫌う傾向があるので、今考えているのは、月朔表に節氣（それと没日も）を一一記入することである。それには印刷技術上の問題もあるが、同時に利用者の抵抗感をいかにして軽減するかの問題もある。

次に節氣関係の論文二三を紹介する。

藤本三郎氏「寛文二年年内立春の芭蕉吟」（『国文学解釈と鑑賞』第二七卷第三号、昭和三七年三月）同氏「寛文二年年内立春の芭蕉吟その他」（『連歌俳諧研究』第二三号、同年七月）では、『千宜理記』（延宝三年刊）入集の句

廿九日立春ナレハ

春やこし年や行けん小晦日つごもり

宗房

を取上げ、「宣明曆によれば、芭蕉が生まれてから延宝三年まで、十二月廿九日が晦日且つ立春だったのは、寛文二年以外にはなかった」ことを指摘して、芭蕉最古の作品とされ、それ以後定説となっている。

萩谷朴氏「正月一日、坎日なりければ―紫式部日記の本文批判（六）―」（『解釈』第二二卷第九号、昭和四一年九月）同氏『紫式部日記全注釈』は、日記の従来寛弘六年とされた正月一日云々の記事を、中野幸一氏が、正月は辰の日が坎日で、この日は巳の日であるから、辰の日に当る寛弘三年とすべきであるとし、岡一男氏の紫式部初宮仕寛弘二年説を支持されたのに対し、寛弘六年は正月三日が立春で一日はまだ十二月節の内、巳の日が坎日であり、従来の当て方でよいとされた。

辻達也氏「大極の生年について」（『史学雑誌』第六五編第一二号、昭和三十一年十二月）は大極の日記『碧山日録』応仁二年十二月十六日の条に、「是日立春、余既享年四十九」とあるのは、立春の日に加齢して四十九となったことを示しているのに、上村觀光氏は誤解して生年逆算を誤ったことを指摘していられる。立春加齢の為に、正月生れでも立春前であると、立春になってすぐ二歳となり、十二月生れでも立春後であると、正月が来ても加齢しないことになる。死んだ日に関しても亦同様な問題が起る。曾て太田晶二郎氏や皆川完一氏が筆者に対して若干の実例を示されたことがあった。

以上は立春ばかりの例となってしまうが、立春については、立秋（秋節）・冬至・春分・秋分などが問題となることが多い。終りに前稿の抜刷を差上げたのに対し、永年古曆同定用に自家用として作成し使用して来られた宣明曆便覧（仮題）（廿四節氣も全部計算して書入れ、一年を一行とされたもの）を特に全部コピーして送って下さった京都の渡辺敏夫氏と、筆者の需に応じて種々の表を考案して寄せられ、曆便覧の構想をも示された茅ヶ崎の吉賀玄二郎氏とに対して深甚の謝意を表する。十分検討して御

厚志に報い度く思っている。又表の校正に当っては大学院学生諸君に大変御世話になった。これ又謝意を表する次第である。

正誤表 (一)

頁	行・欄	誤	正
八	一六	汲日	没日
四八	節気表第二表13年欄	8.14	8.18
五五	万年干支表第二表干支欄	乙未	乙巳
五八	三	一五九二年	一五八二年
六四	万年曆何年欄四行	89	87
同	同何日欄一行	23	28

正誤表 (二) (月朔表)

頁	西紀	月	正誤	頁	西紀	月	正誤
一一	八七五	四	●を付ける	一三	九一五	十二	
二五	一一一二	正		同	九三二	七	
二八	一二九五	閏二		一〇〇九	一〇〇九	八	
三五	一四二八	閏三		一一二五	一一二五	七	
一八	一〇八四	七	●を八から七へ移す	一一三三	一一三三	六	●を除く
三七	一四九八	十一	●を十二から十一へ移す	一五一二	一五一二	十二	
		十二		一六三五	一六三五	十二	

正誤表 (三)

五四頁 万年干支表 (第二表) 干支欄甲申より戊子に至ると、何日欄21より25に至るとの交わる枠内の数字を次の様に改める。

41	42	43	44	45
42	43	44	45	46
43	44	45	46	47
44	45	46	47	48
45	46	47	48	49

附記

この月朔表と節氣表とは、もともと曆断簡の年代推定のために作ったものであり、宣明曆の期間がその必要が最も多いので、一応その期間に限ったと前稿で申述べた。ところがあたかもこれを皮肉るかの如くに、奥州多賀城跡から漆紙文書中の一つとして、宣明曆時代よりも遡る年代の具注曆の断片が出現した。その年代推定に関しては、拙稿「多賀城跡出土の具注曆の年代について」(『日本歴史』三六八号、昭和五十四年一月号)を参照され度い。なお、前稿中の節氣表は宣明曆だけにしか通用しないが、月朔表は前後に延ばすことができ、現にすでに作成済みである。これに前述の節氣・没日を加え、若干の附表を付けたものを先づ出し度いと考えているので、アイデアなり御批判なりをお寄せいただければ幸いである。